

振り返りまた一歩進む

「特別の教科道徳」がスタートして8年が過ぎようとしています。そのうちの6年間、本校は道徳を研究テーマに据え、子どもの実態・変容を捉えながら日々授業改善に取り組んできました。唐津の「新しい道徳」に先鞭をつけ、先頭を走り続けてきたのです。

振り返れば、「特別の教科化」の背景の一つに、いじめの増加・深刻化がありました。全国的にいじめの認知件数は増え続け、重大事態と言われる深刻なケースもメディアを賑わすようになりました。また、SNSの急速な普及や家庭の教育力の低下など、子どもを取り巻く環境は、社会の変化に伴い徐々に姿を変え、価値観も多様化が進みました。「多様な価値観が認められる社会」は、一方で「正解のない社会」であることから、不安も広がっていきました。こうした中、改めて道徳教育への期待が高まり、学校現場はこれに応えるべく「考え、議論する道徳」を手探りで進めてきました。

ものの良し悪し、価値観というものは、親が子どもに教えることであり、学校は、各々の異なる価値観を交流させ、考えさせるところであると、私は思います。例えば「嘘をつく」ことについて。「いつ何どきも嘘は絶対にだめだ」という考え方もあれば「場合によっては必要な嘘もある」という考え方もあります。

このような異なる価値観に触れ、多面的・多角的な見方・考え方を育むことの必要性に照らせば、「考え、議論する道徳」の展開は合点がいきます。社会の要請に応えるものです。こうした機会を、教育課程に位置付け確保できることは、たいへん意義あることです。

また、道徳も時代によって変わることが求められています。例えば、「献身的」と聞くと、良いこと・尊いことと感じます。自身の道徳的な背骨に従い、多くの教師は子ども達のために、自分のことは後回しにして、日々「献身的」に頑張っています。

一方で、真の幸福について世界的に議論が進む中、「ウェルビーイング」の考えが強く打ち出されています。難しい概念ですが、「一人の幸せとみんなの幸せが同時に成立すること」と言い換えられます。裏を返せば、「誰かの幸せが誰かの不幸せの上に成り立つのではだめだ」ということ。価値観の捉え直しが迫られています。

社会生活を営む上で、「変えてはいけないもの」と「変えたほうがよいもの」はあります。道徳的価値、道徳の授業も、時代と共にアップデートすることが必要ではないでしょうか。

この先、自分達が過ごしやすい、新しい社会を創っていく子ども達に、しっかりと「考え、議論する力」をつけてあげたい。そのためには、機会を用意する私達教師が学び続けることが必須です。子ども達は必ず応えてくれます。6年経った今がそうであるように。

学びを止めず、最新の理論と実践で輝き続ける鬼塚小学校でありたい。

これまでも、これからも。

末筆ながら、ご多用な中に何度も来校いただき、本校の研究に多大なるご支援、ご示唆をいただきました、浜崎小学校 金丸ゆか先生に厚く御礼申し上げます。

鬼塚小学校 校長 栗本洋二